「町の本屋を考える」

鳥取市　定有堂書店
店主　奈良敏行

☆　2000/01/15　京都書店組合勉強会にて報告

①　はじめに　（棚づくり、店づくり）
②　京都というランドスケープ
③　本屋は「境界」があいまいな〈開放系〉がいいかも
④　普通の本屋、そして「意味のある本」
⑤　方法としての自主講座
⑥　ミニコミ・開放系・外部のエネルギー
⑦　「定有堂教室」「読む会」「本読み会」
⑧　店づくりのありようが、おのずと棚づくりになってるという話
⑨　本屋の仕事をしてきたことの中での、いくらかの〈気づき〉
（1）〈身の丈〉
（2）〈本屋の青空〉
（3）〈サークル論
（4）で、そんなことが、何んになるか

①　はじめに　（棚づくり、店づくり）

☆最初に、「棚づくり」の工夫話なんかどうですか、とお話いただいたんですが、あまり「棚づくり」の話は得意でないので、「店づくり」みたいな、漠然とした話だったら、いいかナ、と思いました。

「棚づくり」といわれて、つい引いてしまうのは、それほど専門知識があるわけでもないからです。でも、なければ棚はつくれないわけだし、じゃ、どうしてるのか、うーん、どうしてるのだろう、とこの機会に考えてみました。

☆本屋は、自分にとって仕事と云う生活の一部でなくて、生活そのもの、人生そのものなので、どうしても、自分の人生観とないまぜになった話になってしまいます。つまり、役に立たない話でしかない、と思うのですが、これはどうしようもない、大前提の事実なので、ご了承いただきたいと思います。

②　京都というランドスケープ

☆京都は、とても好きな街です。と、いうところで、少し、私と京都との話をさせて下さい。

１９８０年の秋に、鳥取市で本屋をはじめたのですが、その年の夏までは、東京で働いていました。

いよいよ本屋をはじめるぞ、と方向性が見えてきたとき、その年の1月ですが、2、3泊だったと思うのですが、一人で京都を歩きました。

本屋をはじめる、と考えたとき、まず最初に考えたのは、京都の地に立ってみて、これからは物事を考えてみよう、ランドスケープの引っ越しみたいなものから始めようと思ったわけです。

その時は知らなかったのですが、そういえば、京都の六角堂というお寺には、京都のへその石とかいうのがあるそうですが、知ってたら、そのお寺に行ったと思うのですが、当時は知らなかったので、残念なことをしてしまいました。

じゃ、それまでは、どこが好きだったのかというと、本郷とか、神田・御茶の水、早稲田の古本屋街、高田馬場とかだったわけです。つまり、学生街です。京都は街中が学生街というイメージを持つようになりました。（このイメージは間違ってなかったと思ってます。）

☆で、へその石を訪ねなくて、どこへ行ったかというと、当時京都に関係した友人が数人いました。

一人に、昔ヒッピーといわれた人種で、若いころインドへ流れ、インドでは頭を丸めると、お寺でめしを食わせてくれるとかで、どこまで本当かは知りませんが、庭掃除してたらしいです。

で、そのお寺が熱海のお寺と親戚筋とかで、帰国してそのお寺に出入りするようになりました。通いで、本業は別に持っているのですが、気に入られたようで、通信で勉強しろということになり、京都の仏教大学へもときおり通うようになったわけです。で、私に、京都に行ったら万福寺の隣に、ものすごい量のお経の版木があるとこがあるから、見てこい、というわけです。

もう一人、当時自主講座ふうの勉強会に力を入れていたんですが、その仲間が京大の数学の出身で、京都に行くのなら、（私は喫茶店が好きなので）、京大近くの進々堂に行くべきだよナ、と教えてくれました。彼は、大阪人で、京都まで通学していたらしいんですが、へー、あんがい近距離なんだ、と意外だったんですが、その一言がいまでも大阪摂津の日販ＮＤＣまできたついでに、気軽に京都まで足を伸ばすきっか

けになってます。

京都で時々ものを考える、という一つの私の習慣は、そこからはじまったといえます。

鳥取市は県庁所在地で、なぜか、京都で学んだ人も多い町です。一人尊敬するお医者さんがいらして、著作もたいへん多い方ですが、この方は、京都にいるときはとても頭がさわやかにひらめいた、ずーとして鳥取に帰ってきて、あのひらめきが出ないのはなぜだろうと考えたそうです。

で、あ、そうか、京都にいたときは、いつも進々堂で本を読んだり、考えたりしていた。進々堂にはご存知だと思いますが、長くて大きなテーブルがありますネ。このテーブルが良かったんだ、と気がついて（全身冗談みたいな人なんですけど）、こっそり寸法をとりに行って、同じものをつくってしまいました。一枚板です。

私には真似できなくて、でも、何かとても説得力のある話だったので、新建材（組板）ですけど、私も、コピーのコピーを気持ちだけつくりました。その先生のは書斎机でしたが、私の方はただの食卓の役にしか立っていません。

ま、そんなわけです。

③　本屋は「境界」があいまいな〈開放系〉がいいかも

そのあと、県内の書店をできるだけ皆んな見てまわりました。

私の性格の特色になりますが、自分の本屋とか、よその本屋とかを考える時に「境界があいまい」「一種性格にほころびをもっている」というところがあります。（ま、いいかげんな人間がということかも知れませんが）

帰納的に、とにかくたくさん本屋というものがあって、そのずーとしぼったところに、私の本屋がある、というふうに考えます。だから、本屋というのは、皆自分の仕入れ見本という気持ちで、自分の店の延長として考えているわけです。

だから、本屋を本屋だけの言葉で考えるのは、あまり興味がありません。もう少し、境界をあいまいに、あいまいにというのは、本屋とか読者とかいう境界をあいまいにしてもいいのじゃないか、というふうに思うわけです。

地元の本屋のせんぱい方がたにも、当初から、とても親切にしていただきました。本屋って、みんないい人なんだ、とそう思ってきたんですけど、はっきり、素人だから、と顔に出てたみたいで、だから親切にしてもらったんだと、この頃になって納得がいくようになりました。

つまり、境界があいまいだったわけですネ。何だ、たんなる本好きじゃないか、というわけです。

本屋が本好き、という方向は、外に向かってあいまいですね。でも例えば、読者で本屋好きというと、内に向かって、これもまた境界があいまいになります。

私は、本好きだったけど、本屋好きというよりも、むしろ喫茶店好きで、喫茶店で本を読むのが一番至福の時間だったわけです。だから、本屋好きという読者の人たちの発見はとても新鮮な驚きでしたし、ここに新天地があるゾ、と思ったわけです。

本屋を本屋だけの言葉で考えるのは、私はとても嫌いで、閉鎖的な感じがします。何か体育会系的な閉塞感を感じるわけです。体育会系がいけないといってるわけではないのですが、もともとおちこぼれで本屋になったわけなので、かなわないナ、という気がするわけです。

で逆に、本屋を読者のことばで考える、という境界をあいまいにした立場だと、何か開放的な気がします。前者が「閉鎖系」だとしたら、これは「開放系」というのでしょうか。

本を読んでたら、開放系というのは、生命体が典型ですが、「外部からエネルギーを取り込んだり、別の形にして放出したりする」というすばらしいありよう、らしいですね。……本屋って、これだよナ、と思ったわけです。

④　普通の本屋、そして「意味のある本」

つまり、そういう自分の性格って、かなり問題があるナ、という気がします。実際問題があって、普通の勤め人の仕事が普通にできなくて、いわば落ちこぼれて、本屋になったわけです。

あ、でも本屋が落ちこぼれ、という意味でいってるわけではないです。本屋はとてもすばらしい仕事だと思っています。

ただ、私の本屋の出発点というのが、いわば敗者復活戦だったというわけです。敗者ですから、もう、よけいなことはしたくない、と思うわけです。

普通の勤めはできなかったですけど、でも普通の本屋になれた、と思います。

ここで、普通というのは、よけいなものに惑わされないで、シンプルに本屋だけで生活している、という意味です。普通というのは、ここではとてもいい言葉になるから不思議です。

で、自分の本屋のその普通の仕事をどういうふうに考え、どういうふうにしているか、ということになります。

町の本屋が普通に生きてれば、結局「身の丈」で動き、考え、仕事するしかありません。　私はわりと、観念的で、本当の人生よりも、言葉で考える人生のほうが好きなので、「意味のある本」とのつき合いに魅かれます。意味のある、というのは、本を読んで考えるのと、人生のいろんな喜怒哀楽を考えるのが、つながっている、というくらいの事です。

「言葉は言葉」「人生は人生」という人たちに混ざると、どうも居場所を失ってしまいます。本屋の店内では、両者が出会うわけですから、とてもいいナ、と思います。

で、無為徒食した若い頃本ばかり読んでたら、「人間の本当の仕事は、自分自身の人生を生き抜くことだよナ」、と思うようになってしまいました。そんなもんだから、私の２０代半ばに亡くなった母が、そんなどうしようもない私を横目で見て、「全く、本がカタキだ」といっていたものです。で、幸い早くに母が亡くなり、すぐ勤めも辞め、ぶらぶらして本を読んだりしてたわけです。

話がそれましたけど、で、その「意味のある本」が好きだったのですが、でも、不思議なことに、意味のある本、（ちょっとこういう言い方わかりにくいので、簡単に人文書と言っておきますけど、）そんな本をとくに専門的に並べようと思ったことは、全然なかったわけです。

けっこう、純朴だったので、本を商えるというだけでうれしかったので、もう中身は何でもいいです、という気持ちだったわけです。うーん、やはり、性格が開放系なんでしょうか。もう、どんどん取次の人のいう通りにしました。ただ、１００パーセントいう通りにしたわけですが、１００パーセント全力でお店をつくっていただいてる、という感触もそこ

にはあったわけです。

⑤　方法としての自主講座

普通の本屋、というふうにいいましたが、本屋は普通でいいんですけど、でも、生き方は、したいようにしたい、とこれはもうどうしようもないほど強くあったわけです。　意味のある本を並べることに、それほど執着はなかったわけですが、でも意味のある生き方にこだわっている人たちと交わりたい、と思ったわけです。

読書会ふうなものが、なぜか自然にはじまったわけです。たぶん、開放系（素人ということですが）だったので、読書好きで外に輪郭があいまいな私と、本屋好きで内に輪郭があいまいな人たちが、うまく交差したのだと思います。

一応、ぶらぶらしてる時に、自主講座の読書会などに入れ込んでいたので、（私は、本屋好き、というより読書会好きなのかも知れませんネ。）漠然とした方法論はあったわけです。

まず、語学の講座を始める。それから思想的な講座を始める。これは、まず継続しやすい。継続しやすいというのは、目的がはっきりしている、という事です。

最初フランス語、つづけて心理学の講座、エリクソンという人をテキストにした「アイデンティティ論」というものでした。

そのあと、数え切れないほどのたくさんの講座が、加わったり、終了したりするわけです。長いのは、１０年とか、それ以上現在も続いている講座もあります。

こういう、自分でいうだけですが、「意味のある」交わりが、自分にとっての本屋というもののあり方であり、棚は、おのずとこれらの延長にはじまるものだ、という気がしています。

「意味のある」というこのスタンスは、いつも、「こちら側」と「あちら側」というものを意識して考え、生きているスタンスかと思います。もともと「棚」もそういう性格のものなんじゃないかと思います。

⑥　ミニコミ・開放系・外部のエネルギー

ところで、もう一つ、
私はミニコミが好きです。
たぶん、これも性格なのですが、しんぼうできない、というかガマンするがの嫌いなのです。
思いついたら、すぐやりたい。努力しないで、未完成のままでも、とにかく始めてみたい。こういうところから、ミニコミに魅かれるようです。

母が亡くなって最初に仕事を辞めたときに、ガリ版のとても高級なのを買いました。で、ミニコミを、しかも個人雑誌というのを始めたわけです。読書会なんか盛んにやってたので、書くことはたくさんあったわけです。手渡す人もたくさんいました。で、やっぱりミニコミ好きの人たちが集まってきて、共同でもう一つ別のミニコミを始めました。これがガリ版刷りの雑誌で「定有」というタイトルだったわけです。定有堂書店という名前はここから来ています。

読書サークルに集まる人たちは、あ、このサークルはそういえば、心理学講座の講師だった鳥大の若い教授の先生が、「ボクたちのやってるのは町の寺子屋だネ」と常々おっしゃってたのですが、結局、本屋好きの人たちは同時にミニコミも好きなわけです。
昔、個人通信なんかつくってた、という話をすると、ちょうどその頃ブックレットというのがブーム全盛期だったので、ブックレットとまではいかなくても、個人リーフレットというのを作ろう、ということになって、１０人くらいの熱心な人たちが、それぞれＢ５一枚くらいのリーフレットを個別につくり合い、店内にボックスをつくって、配布し合ったわけです。
その後、やはり一人一枚というのはしんどいネ、ということになり、輪転機とか、ファクシミリ印刷機とかを使って、これは、どういうわけか労働組合の処分品などをメンバーが手に入れてくるわけですが、「定有堂ブックレット」というのを作り始めました。全くの遊びなのですが、本屋好きの人たちというのは、当然ですが、とても「本」をめぐっての情報にディープなわけです。本屋の品揃えまで、一部任せてしまうところがあり、とても統一性のないアナーキーな品揃えになった時期もあります。

例えば、やはり本屋好きなある女性がいて、なぜかいまはロシアで生活しているのですが、あつみちゃんという子で、「あつみちゃん文庫」という棚を常設したことがあります。棚の選書だけではもの足りなくて、「あつみちゃん文庫通信」という、おすすめ本のチラシまで作って設置してました。

この人は、日本海新聞という地元の新聞のヤング欄担当の記者で、結局余力を、こういう形で発揮して遊ぶことにたけていたわけです。

「開放系」なわけですから、こういう外部のエネルギーと、渾然一体になりやすい体質が強かったようです。

新聞社支局の人とか、放送局の人とか、そういうところの余力を持て余した人たちのエネルギーが、とても集まり沸騰した場であったと思います。

⑦　「定有堂教室」「読む会」「本読み会」

これは、鳥取市という内部、それも定有堂書店を中心としたホント半径1キロの小さな世界の話でしかないのですが、最初申しましたように、「身の丈」の物語としては、とても本屋として恵まれた展開であったわけです。

で、本屋の話ですが、こういういま現在の情報に敏感な人たちと「情報誌」的なものをつくり合う一方、人文書の読書会というのも並行して継続してたわけです。

ここは、教員の方々やお医者さんなども多く集まっている会です。13年くらい続いているでしょうか。この人たちとは、少し狭く、思想的な内容のミニコミをつくっています。「定有」という小冊子です。

これはコピーで作っています。本屋を始める前にも「定有」というのを作っていたのですが、第2期、第3期と、少しずつスタンスを変えた編集に移行しながらも、断続的に持続しています。商業的な手の入る印刷物をつくるというのは好きじゃないです。手づくり以上のことは、する気はありません。

その後、というか同時並行なのですけど、たまたま鈴木書店の井狩春男さんとの恵まれた出会いがあり、１９９０年くらいから「定有堂ジャーナル」という「本」をテーマにした小冊子をスタートしました。一面トップページに毎月井狩さんが、「定有堂で朝食を」という連載をお申し出下さったので、全国各地だけでも、版元の本好きの人たちをはじめ、２００人以上の県外の定期購読読者の方々ともお付き合いすることとなりました。

これは、９年数ヵ月１１２号にて、昨年２月ですが、いったん休刊体制に入りました。製作は、編集長はじめスタッフみんな、最前申しました本屋好きの人たちが作ってくださり、（発送作業もそうなんですが、）私は何もしなくてよかったので、いくらでも持続できたのですが、逆にこのままだと、死ぬまで続くゾ、と途方もない事実に気づき、ブレーキをかけてみたわけです。

この一年は、互いに充電期間ということで、違うエネルギーの用い方に当ててます。 例えば、人文書の読書会があまりに高度になりすぎてるので、ちょっとやばいかナ、と思ってもう一度振り出しに戻って、やさしい普通の読書会をやろうと模索し、前者は「読む会」というのですが、もう一つ、小説を中心とした「本読み会」というのを、休刊と入れ違いに並行して始めています。

この講師は、そのうち小説家になってもいいナ、と夢見ている開業医のお医者さんです。「Ｊ文学」というのを好んで取り上げています。内科で開業ですが、もともと精神病理学が専門なので、なかなか人を引き付ける力のある方です。そういえば、人文書の方も講師は初代は県立図書館の館長だったのですが、お亡くなりになり、現在はメンバーが引き継いでて、大きな病院の心療内科のお医者さんです。

⑧ 店づくりのありようが、おのずと棚づくりになってるという話

で、棚づくりの話ですが、

結局、ほとんど、他力本願の形で、たいして私自身には専門的な知識はないわけです。 本屋好きの人たちの、生き方の輪郭、境界のあいまいさやほころびが、店内に流入してきているというのが実情で、けっこう、こういう人たちに本を借りて読むということも多いのです。あるいは、読書会でもまれたり、リスト作ってもらったり、で、棚自体がわりと公共広場ふうになってるいるのではないかと思います。

最近、仕入れの話をしてて、面白いネと数人の人にいわれたことがあります。

仕入れするとき、なんとなく、５冊くらい、確実に売れそうな本を中心に探す、という話をしたときです。なぜ、５冊なのと聞かれ、そういえば聞かれて初めて考えたのですが、ま、その内３冊３人分くらいは、こういうわけですから、買う人の顔が見えます。顔が見えなくても、３冊売れるんだったら、あと2冊くらいは雰囲気でお客さん付いてるので売れ

ます。それにこれくらいの冊数で動く本なら、版元も減数するようなところではないし、なんとなく、気持ちいい仕事ができるので、大切にこまやかに目配りできる、というわけです。

仕入れには、新聞、雑誌、ＰＲ誌とかいろんな媒体に目配りし、こういうお客さんの一歩先の情報を広い集め、（つまり、仕入れの情報は配達先に転がっている、と思います。）なるべく、あっ、といわせて喜ぶ顔が見たい、という気持ちがあるものですから、情報としての「本の話題」を探すのも、それ自身道楽の一つになってしまっています。

本好きの人たちとのつき合いで、私自身ディープな本屋好きになって、興味は読書ならぬ本屋めぐりというところがあります。市内の本屋は、もちろん散策するのが、楽しみです。本屋の人とつき合うのも好きですし、いい意味で競いあってもいます。一番店には熱心な人が多いので、ひそかに「仕入れ週報」の交換などもして、全力を出し合っています。こういうのもやはり、輪郭、境界のあいまいさいっていいのかもしれないですネ。

他力本願の品揃え、と言ったのですが、最近、いいことか悪いことかわかりませんが、そろそろ、品揃えに道楽してもいいかな、という気もしてきています。逆に言うと、とても自分を抑えて、品揃えしてきたナ、という気もするわけです。

人を喜ばせる品揃え本位に努めてきたということで、これはこれで楽しいことだと思います。

だから、本当の棚づくりは、これからだという気がします。店づくりのありようが自ずと棚づくりにつながってしまっている、という話をさせていただきました。

⑨　本屋の仕事をしてきたことの中での、いくらかの〈気づき〉

（1）〈身の丈〉

「自分の仕事」を考えるとき、いつも自分の〈身の丈〉を省みるようにします。

可能性としては、一見どんなこともできるような気がするのですが、ただ、いざとなったら一人でやる。あるいは、や

れるか、というふうに考えます。
　ほっとくと、どんどんふくらむわけですね。ふくらむことは、なにかいいことのように思えますけど、作業の速度を落とします。つまり、余分な作業メモリーを増やしてるわけですから、肝心なメモリーをくってるわけです。増設するか捨てるか、この場合捨てる選択にたつわけです。
　だから、〈身の丈〉のフットワークの軽さを失わないようにし、また目安にもするわけです。

　これは、いわば、広がりとしての〈身の丈〉ですが、「時間」軸での〈身の丈〉もあるとおもいます。
　処理することが多いのだから、「先送り」にしない。どうせできなくなるのはわかってるわけですから。と、すると、いますぐできる課題しか抱えこまない、ということなどが、大事だなと思うようになりました。

（2）〈本屋の青空〉

　町の本屋が生存する環境って何んなのでしょうね。
　町の本屋がところを得る、得ているぞという感触を〈本屋の青空〉と言ってみました。　これは、ただ気分で言ってみただけのことだったのですが、なんとなく、いいネ、とおっしゃって下さる方々が多く。うん、そういえば、何だろうと考えるようになった言葉です。
　結局それは、フォーマル、アンフォーマルというようなものと関係あるナと思うようになりました。
　町の本屋は「利便性」で生きていると思います。フットワークの軽さ、とか、「ま、そこのところよろしく」とかいうかたちで生きてるわけですね。
　私たち町の本屋は、アンフォーマルな形に仕事を持ち込む、という必要があるような気がします。で、このアンフォーマルって何だろうと考えるわけです。
　なぜ、青空か。例えば、焼け跡には青空が広がる。それはいつも復活の希望としての青空であるわけです。なにかが、なくなった後に、残る希望の兆し。それが青空じゃないかなと思います。
　少し飛躍して、「アーカイック」ということで考えてみています。つまり、古層です。読書会で、ひと頃、「贈与論」というのというテーマに取り組んでいたことがあるんですが、そんな事とつながってる、という気がしています。
　ある本を読んでたら、個人ショップと百貨店に触れたとこ

ろがありました。（山口昌男の『本の神話学』）。簡単にいうと、

「個人ショップでのシステムは、売り手と客の間に一定の人間関係（精神的つながり）を前提にしている。いわば、農村マーケットの商行為の延長上にある。」

百貨店には、質屋がそうであったように、全くいろいろな種類の品物が寄せ集められているわけです。つまり、近代化への離陸というのは、「事物との触れ合いからおのれを剥離（はくり）」するわけです。

〈青空〉は、そんな近代化の夢を砕きます。

ここでいう〈青空〉は、ゲマインシャフト的、つまり、古代古層的、つまり仲間どうしの意識に立脚するものです。

ここに、町の本屋の根拠、根みたいなもののありかを感じています。

（3）〈サークル論〉

町の本屋には、「根」が必要です。人と一緒に何かをやる、というところに、この「根」が生まれると思います。「サークル」もその一つです。

まず、「ながくつづける」ということを課題とします。

そのためには、「なんとなくやる」ということが大切かと思います。

サークル「焚き火」論というものがあります。

暖かそうな火があれば、ふと目に入った人は立ち寄って来ます。

そのためには、いつも火が消えないように、火を守る喜びに自覚した人がいなければなりません。

なぜ、そんな必要があるかというと、人が集まって、一緒に何かを楽しみ合う、ということを求めるからです。

で、もし、長く続けるということを大切に考えるなら、どうすればいいか。とにかく何でもいいから、作ろうじゃないか、という人がまず3人。つまり、火を守る人たち3人です。

人の集まりというものを見てると、〈主題〉と〈きっかけ〉というものが、どうもあるような気がします。

読書会なら、つまり、「テーマ」。人文書を読むとか、小説を読むとか、あるいは映画を見るとか。すると、テーマに興味のある人は、ちょっとのぞいてみようかナ、と思うし、興味なければ参加しないわけです。

ただ、もう一つ回路があって、人の集まりって関心あるし、親しい人が参加してるから参加してみようとか、これは「きっかけ」に魅力があるわけです。

もうひとつ大事なのは、「なんとなく」やる。自主運営がいいです。人をしばってはいけないので、「なんとなく」やると思いながらやるのが大切なような気がします。

自主運営というのは、「きっちりしてない」わけですから、これをおぎなう、もう一つ事務局的なものが必要かもしれません。つまり、「焚き火」を守る人たちです。

（4）で、そんなことが、何んになるか

仕事は、結局は〈運〉かと思います。ですから、「運をひらく」一つのやりかただと思うのです。

他にもっといい、いろんな方法があるだろうけど、自分にできることは、これしかない。それだけの事です。

なぜ、これしかないのか。

こういう狭い道へ狭い道へと、いろんな障害物をより分け、乗り越えながら生きてきたら、いつの間にかこんなところへ抜け出てきた、という自分一個だけの「狭い話」をさせていただきました。

ありがとうございました。

（終了）